

# Y夫の袋づめ

吉岡 晶子



幼稚園という新しい環境に入った時、子どもたちはそれぞれの気持ちをいろいろな姿で表す。あちこち動きまわる子、不安でジーンとして泣く子、不安な気持ちを泣いて表す子、教師のそばにいて安心していられる子、何かを支えにすごす子など様々である。

そんな中で、Y夫は入園当初は私のそばにいたり、じっと周囲の様子を見たりして静かに不安に耐えている言葉の少ないおとなしい子であった。入園してしばらくたった頃から、Y夫は登園すると「先生、袋ちょうだい」と来るようになった。紙袋だったりビニール袋だったりするが、袋を手渡すと、小

さい積木やおもちゃに小さい汽車をいくつか中に入れて袋の口をセロファンテープでしっかりとめるのである。そしてまた「袋ちょうだい」ともらいに来て二重に袋づめにし、再び袋の口をセロファンテープでとめるのである。破れたところはセロファンテープでとめる。そしてその大切な袋を持って私と一緒に動いていた。時にはその袋を持って大好きな自動車に乗ったり電車ごっこをすることもあった。人形を心の支えにしたり、絵本を心の支えにしている子どもたちもいるが、Y夫の二重の袋づめを見るとこちらもせつなくなってしまう。

Y夫はこの袋を家に持ち帰ったこともあり、母親の話ではその袋を箱に入れ、ガムテープで封をして枕許に置いて寝ることもあるという。この袋づめがY夫の気持ちを象徴しているように思え、袋の中には何を入れているのだろうか、不安な気持ちを入れたのか、自分の大切なものを入れたのか、そういうY夫をどう支えてあげたらよいのだろうか、悩みつつ、とにかく袋づめに付き合っていくことにした。

Y夫は袋を自分の引き出しにしまって、遊びはじめようになり、降園後にY夫の引き出しを見ると袋が入ったままになっていることもあった。でも、時には私の気持ちの中にも「またか」という思いが出て「袋ちょうだい」と言われてつい「袋はないかも知れない」とか「袋あったかしら」など言ってしまうこともあった。そうすると「小さくてもいいから」「どんな袋でもいいから」など言うのである。あせってはいけなさと私自身に言い聞かせ、Y夫のやりたいようにしていい

た。そんな日々がしばらく続いたのである。

Y夫はがまん強いし、友だちに強く自分の気持ち主張することも少ない。大人の期待にこたえようとする姿も見られ、一生懸命すぎるような気がするのである。でもY夫自身もそうしている自分の方が自分で認められるようなのである。そのようなY夫が毎日せつせと袋につめていたのは一体何だったのだろうとつくづく思う。Y夫を見ていると「そうじゃなくてもいいのよ」、と伝えたくなくなるがまんしなくてもいい、泣いてもいい、めちやくちゃしてもいいから無理しないで、と言いたくなる。でも、こちらがそういう思いを強く持ってしまうとY夫の気持ちは混乱するかも知れないし、また新しい期待にこたえ

ようとするのではないか、そう思い、Y夫の小さな変化を待ち、その時を大事にしていくことにした。

夏休み明け、二学期が始まりY夫はどうなるだろうかと心配していたが、やはり「ちょうだい」があつたのである。何日か続いたある日、私の中に「もう大丈夫かも知れない」という思いがあり、「もうないの」と答えるとY夫は「うん」と頷いて遊びに行った。もしかしたらもう少し待っても良かったのかも知れない、早まった対応だったのかも知れない。今でも自信がないが、あの時Y夫と二人で「もう大丈夫ね」と頷き合った気がするのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)